



亡くなった母・志奈枝さんの介護で、病気を長らく放置していた

藤田先生が執刀した 女優・歌手の松島トモ子さんの インタビュ―記事

股関節手術 ドタバタ奮闘記

松島トモ子
歌手



病気を放置していた理由

「変形性股関節症」

これが私の病名である。変形までは許せる。問題はその後。病名を訊かれ、答えると、なぜか股間を連想させる。

何事も美しくありたいと願っている私にとっては、何とも不名誉だ。しかし、この股関節症、五年と数カ月、私を悩ませ続けた。歩くと激

ついていると思ひ込んでいた。

あれもしたい、これもしたい。やっと自由になれる。でも、現実は大違い。涙も出ないほどの落ち込みよう、体の半分がもぎとられるほど痛く、体がバラバラにならないよう自

痛をとめない、二三日歩行できないときもあった。

仕事るときは痛み止めの注射を打ってもらい、薬を飲み続けていた。なぜ、放っておいたのか。

私の母が九十五歳のとき、レビイ小体型認知症を発症した。老人施設は断固拒否、自宅介護を余儀なくされる。

たくさん医療従事者にめぐまれたが、夕方から朝の九時までは私が

自分で自分をしっかり抱きしめていた。

永六輔さんの声

母の遺影の前にうずくまり、なすこともなく座り込んでいた。

「ママのところに行きたいな」

つぶやく私に、永六輔さんの声が聞こえた。

「トモ子、君が死んで、一人でも泣いてくれる人がいたら、自殺は駄目だよ」

云われたときの私はまだ非常に若く、仕事も人生も順風満帆だった。その時はピンともこなかった言葉がよみがえってきた。

泣いてくれる人は何人いるだろう。ひとりはいるわよね。指折り数えて、片手はいる。

私は、ボロボロになった心と体をたてなおすことにした。
イザ！ 変形性股関節症をなおそ

全責任を負う。目を離すことができない。

私の病気の手術のため約三週間の時間をとるなど、まったく不可能だった。私はその間、必死に堪えた。

荒れ狂っていた母も次第に天使のようにやさしく可愛らしく、本来のレディの姿で百歳と八カ月で大往生をとげた。

私は母が亡くなったら……正直なところ万歳三唱、バラ色の人生が待

う。

勇気を出し、やっと立ち上がろうとしたら、そこには落とし穴があった。

自分が勝手に頼りにしていた先生が引退されていた。介護の五年数カ月はあまりにも長かった。まったくあてがない。しかし紹介していただと、万が一、気に入らなくても断るのが難しい。

自力でやろう。最初に結論をいいます。これは無謀でありました。流浪の民の序曲が始まります。

第一番め、脳ドックでお世話になっている大学病院へ。脳では大変有名だが、整形外科の腕はいかに。主治医（心療内科）に紹介状を書いてもらう。検査から第一番めの先生に会うのは非常に簡単だった。まったく混んでいない。若い先生は感じがよく、「大丈夫、すぐ良くなります

よ」とニツコリ。頼んでもいないのに、痛み止めを打ってくれた。「????」

ハテナマークが浮かぶ。

私は仕事のとときだけ必死に頼み込み、しぶる先生に泣かんばかりに頼み込んで、ようやく打ってもらい痛み止めをこんなにも安易に。大丈夫か？

次回の検査の予約をし、部屋を出る。壁に貼ってあるポスターの文字が目飛び込んできた。「セカンドオピニオンもとりましょう」。よし、これだ。次に行こう。

第二番めはクリニックだったが非常に混んでおり、外にも患者さんが溢れ、まるで行列のできるクリニック状態。活気があり、患者さんをかきわけ控室に案内されると、有名な俳優さんがいた。

「トモ子ちゃん、よくここを探しま

と頑張ってるよ。

「ウン。もつともだ。元都知事の名前は何だっけ？」

「〇〇さんですか？」

「そうそう。あの人を執刀した人が、素晴らしく上手かった。その人に連絡しますよ。他にも二、三当たってみるけど、あなたも探してみてね」

この時点で、私の事務所に病院の知り合いを訊いてみる。赤坂のクリニックを紹介され、これが三番め。その先生は偶然に、昔、私の家の近くに住んでいて母の主治医だった方。この先生はもう執刀はされない。

「なんでこんな三流の所ばっか行ってるの。僕が名医を紹介してあげるから」

相変わらず口が悪い。この先生はブルドッグをたくさん飼っており、私

したね。この先生は名医だよ。トモ子ちゃんの手術も大成功ですよ。頑張ってるね」

このコロナ禍に握手までして下さる。

美空ひばりさんと酷似？

私は大いに盛り上がり、検査を受け、私の股関節のレントゲンの画像を見入っている先生の後ろに座る。

「なぜ、こんなにひどくなるまで放っておいたんですか？ 骨がグチャグチャですよ」

素人の私が見てもそれはわかる。

「母の自宅介護が続き、自分の時間がとれませんでした。申し訳ありません」

と謝ると、

「どんなに痛かったでしょうね。よく我慢しましたね」

私は思わず先生の胸に飛び込み、

は昔、ブルドッグ先生と呼んでいた。

両足を一気に手術

この先生のおかげで、お待たせしました。やっと名医のご登場！

国立病院機構東京医療センター人工関節センター長、藤田貴也先生。

ブルドッグ先生によると、藤田先生は年間二百件、股関節の手術を手がけている方で、素晴らしいスタッフもそろっているとのこと。

第二番めの先生からは、「〇〇都知事を執刀した医者は他県にいるので、東京なら藤田先生を推薦します」と電話が入る。

二番めとブルドッグ先生が同じ意見だった。

ここで私が病院を転々として得た豆知識をご披露すると、MRI、レントゲンなど、全てのデータは患者

号泣しそうになる。「美空ひばりさんの画像によく似てる」とつぶやく先生。

「あー、ひばりさんのように歌が上手いとかいわれるならうれしいですけど、股関節が似ているといわれなくても……」

「そりゃ、そうだよな」

それから丁寧に検査して下さるが、微妙なところで話ぐいちがう。

「あー、先生はご自分で執刀されないんですか？」

「しないよ。前は股関節もやっていただけ、いまは脊髄が専門」

ガン。

「それじゃ駄目じゃん」

これは私の心の声。

「先生、歌にも上手、下手があるでしょ。私は手術の上手な方にしてもらいたい」

側が要求すれば得る権利があるという。医者は断れない。二番めとブルドッグ先生はすぐにデータを下さった。一冊めだけは、当院で手術しないなら渡せませんと云われた。

これはルール違反。一番め以外のデータは、あらかじめ全て藤田先生に郵送済み。それがどれだけ役に立ったかはわからないが、少なくとも患者の熱意は伝わる。

一月六日、藤田先生とお会いする。緊張で足ががくがくする。

「右側が相当ひどいですね。手術をする少し足が長くなります」

「望むところです。私はチビなので思いっきり長くして下さい」

「いえいえ、そういうことではなく、足の長さが左右違つと、少しひきずることになります。左も悪くなつてるので、二本同時にやりましょ



3年間に及ぶ自宅介護をやり通した、涙の記録。
小社刊 1540円(税込)

ルネームで本人確認される。規則とは知っているが、そんなに確認をしなければ間違える可能性があるのかしら？ 手術を待ち、心細い患者はだんだん不安感がつのる。

三月二日朝九時の手術。自分の足でスタスタ病室に入り、わかっているのは手術台に寝たところまで。次に目をさますと自分の部屋のベッドのなか、管やら点滴の袋などいっば

いぶら下がっていた。手術は済んだのだ。私の足首は両足とも動かせる。大丈夫、足はついてる。その日だったか翌日か記憶は確かではないが、藤田先生から手術は大成成功だったと伺う。左足四十分、右足四十二分、計八十三分で終了。最速だったとの報告に、「早ければいいのか？」という顔を私がしたのでらう。

早ければ体の負担も少なく、菌にもふれにくく、回復が早いと説明して下さる。最初は四時間と聞いていたのに、約一時間半。やはり神の手だ。

娑婆の空気に感動！

手術の翌日、理学療法士が病室に来て、立つ練習をする。聞いてはいたが本当だった。たくさんの管をつ

けたままだったが、全体重を体に乗せしつかり立ち上がり、二〜三步だけ歩けた。あれだけの大手術だったろうに、すごい。

二日めには車椅子でリハビリテーションルームへ。パーにつかまって、カニ歩きや歩行の練習。三日め、バジャマを脱ぎ捨て、入院のために新しく買ったトレーナーの上下は計三組、それを着てちよびり薄化粧。歩行器を押して「おはようございます」。

昨日は緊張して見えなかったけど、恐ろしい光景を目の当たりにした。おむつ丸出し、浴衣のようなものをひっかけた人々がいる。海岸に打ちあげられたコンブのように、デロデロのヘロヘロ。雌雄が定かではない。

永さんが云ったつげ。

う。いまはその術式が主流です」

右足は覚悟していたが、両足一緒とは……怖くて胸がつぶれそうになる。

「先生、私は母を亡くし、体重がかなり落ちてます。四十キロが三十六キロになっています。手術に耐えられるでしょうか？」

「大丈夫ですよ。痩せているほうがデブよりやりやすい」

六月十日にコンサートをやることをお話しすると、「充分でしょう」。手術日を探して下さるが、スケジュールが満杯の様子。

「三月二日が直近です」

あと二カ月……やると決めたら、なるべく早く。

「もっと早いありませんか？」

「ウーン、ひとつだけ空いてますが、術後の翌日、私がいまませんよ。いたほうがいいでしょ」

「三月二日でよろしくお願いします」

「最速」で手術完了

「手術の前、これを見ておいて下さい」

紙を渡される。書いてあるのは、藤田医師が作成した手術の説明動画をYouTubeに限定公開しており、そのQRコード。

藤田先生の解説があり、この方法だと筋肉を傷めないのが術後の痛みも少なく、歩行能力の回復が早く、出血も少ない……。

ここでやめておけばよかったのに、他の動画を見るとかなり刺激的。足の上部で道路工事がおこなわれているよう。筋肉をヘラでよけて、ひらいて何やらドリルのようなもので骨を切り、大きなこけしの親玉をガリガリねじりこむ。思わず目を覆う。

三月一日入院。友達二人と親戚がナースステーションまで見送りに来てくれた。ここからは、コロナのため面会謝絶。心細さに「ねえねえ、手術かわつてよ」とだだをこねてみる。

全員に拒否され大きなスリッパをずりずりひきずっていると、看護師さんがサッと持つてくれる。手術前日はすることもなし。

まず藤田先生が病室に見え、「不安なことはありませんか？」。女性の先生も「一緒に頑張りますよ」と云って下さる。男性の先生が現れ、私の足に黒々とマジックでRとLを書いていく。ライトとレフトか。私の胴体には右足、左足、ちゃんこくつついてるのに、それもわからないの？ 大丈夫？

看護師さんが血圧、熱をはかり、薬を持つてくるたび、毎回、毎回フ

歌って 喋って いっしょうけんめい
松島トモ子
コンサート
 vol.18



ゲスト出演
 松川義昭、小川景司
 ピアノ：城所潔

2022年6月10日(金)
 開場午後1時00分/
 開演午後1時30分

成城ホール
 Tel.03-3482-1313
 世田谷区成城6-2-1

入場料
 前売・当日共に
 4500円(全席指定)

チケット取扱
 チケットぴあ
<https://t.pia.jp/>
 (Pコード:214349)
 K・企画
 Tel.03-3419-6318
 フォーム予約
<https://www.k-kikaku1996.com/work/matsushima/index.html>

美しい骨を思い出す。まっ白でサラサラだった。
 「焼いた時、これは残りますか？」
 「ハア？」
 「私が死んで火葬場で焼かれたら、これはゴロンと出ますか」
 先生はしばし絶句のあと、
 「出ます」
 「ゴロンか……骨まで美しくと願った思いは潰えた。
 一番めの先生が、
 「あなたの股関節の変形は、五〜六年のものじゃないですよ。先天性ではないけど、赤ん坊のとき、劣悪な

環境で育ってないですか？」
 私は旧満州の奉天で生まれ、旧ソ連が日ソ中立条約を破り侵攻してきたとき、生まれて十カ月、全く陽光をあびることのできない避難生活を強いられた。その後の栄養失調状態で引き上げ。
 「お母さんの抱き方も問題ありかな」と先生。そういえば、小さい時の私は右足が曲がっていた。私の戦争の歴史はいま頃になって体に出た。
 母が認知症になり、幻視を見ておびえたのは、ドロドロ音をたて、攻め込んできたソ連軍の戦車だった。

ましまともしも
 一九四五年、満州国奉天市生まれ。東京都目黒区育ち。女優、歌手。

むごい戦争は二度とくりかえしてはいけない。ウクライナの赤ちゃんを見ると、そのまま私の生い立ちと重なり、涙で見えない。
 サテ、これからどう生きよう。永さんがご自分の病名を洒落にして、パーキンソンのキーパーソンと名乗っていたつけ。私もサイボーグ・トモ子はいかががでしょう。バラ色の人生は無理だけど、チタン色の光り輝く人生は、間違いなく始まるのである。

「トモ子、年をとると、おじいさんかおばあさんかわからなくなるんだよ」
 あー、これが。
 何せコンブは全くやる気がない。「○○さん、歩かないとお家に帰れませんよ。一人暮らしできませんよ」と叫んでいる介護士もいるが、無反応。
 気合はどうした！
 私を見よ！ 歩行器から杖、杖から自分の足で着々と進歩している。トレーナーも毎日着替え、できるものならピカピカ光りものをつけたいくらい。
 「おはようございます！ おはようございます！」
 アッチコッチ声をかけているうち、小さく手をふる人もいる。何だ、生きているじゃん。
 十日め、私は階段の昇降もできる

ようになり、駐車場まで歩いた。久しぶりの娑婆の空気。なんと美味しいこと。私だって、退院したからといって誰も待つてくれる人はいないが、入院の費用だって大変だ。二〜三カ月、一年以上いる人もあるそうだ。
他人事ではないウクライナ
 病院の御飯の美味しくないこと。これは想像以上だった。三食ある。三食とも山盛りの白い御飯、一回百八十グラム。器も美しく、お品書きも添えてある。野菜、魚、豚、鶏の煮物。なんでこんなに不味く作れるのかなー。
 私は本来二食、炭水化物はあまりとらない。看護師さんが食器を下げてくれるが、サッと片付けてくれる人は有難い。蓋をあけて点検する人もいる。

「食べてないじゃないですか」
 「すみません。運動してないので食欲が……」
 それが度重なる時、
 「食べないと治りませんよ」
 「あのー不味い……」
 と私。
 「病院は美味しいものを食べるところではありません。病気を治すところです」
 と叱られた。こもつとも。
 三週間の時間をとっていたが、二週間足らずで退院した。直前に、藤田先生から私の股関節の画像をみせていただいた。
 大きなコケシのようなものがガツチリはめこまれている。フーム、新しい足とのご対面。
 「これはなにできていますのですか」
 「チタンです」
 母を火葬場で焼いてもらった時の